



筑紫女学園大学リポジット

Archaeological World in the Novel "MACHIKO" by Yaeko Nogami and Its Historical Background

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/137

野上弥生子著『真知子』における考古学像とその背景

大 津 忠 彦

Archaeological World in the Novel “MACHIKO” by Yaeko Nogami and Its Historical Background

Tadahiko OHTSU

I はじめに

その語義を辞書に探り、たとえば『広辞苑』（岩波書店、第三版、1983年）によると、考古学とは「遺物や遺跡によって人類の古文化を研究する学問。古く古物学といった」とある。いますこし専門的な定義を検索すると、『世界考古学事典』（平凡社、初版、1979年）には、「広義の歴史学の一分野で、発掘を行なうことを本領とし、人類が残した物質的資料、つまり遺跡・遺物の解釈を通して、人類の過去の生活ないし文化の変遷を明らかにする科学」とある。これらは、世界的にみて18世紀半ばより漸次興った産業革命以降に、そして日本近現代史においては明治維新以降に確立していった近代考古学の方法論に拠っていることを知らしめているように思われる。

それでは、世間が「考古学」をどのように認知、あるいはどのような理解のもとに受け止めているか、となればしかしこれはまた別問題である。こんにちですら、「考古学」という言葉自体は知りつつも、それは「発掘」やある種の「探検」と殆ど同義語であって、恐竜化石の探査をもその内に含むと理解（誤解？）されているのが実情である。学界と、その学問についての世間の「理解」に乖離がみられるのは往々にしてあり得ることであり、世間一般ではその存在すら知られない場合も決して少なくはない。

長いとは言えないかもしれないものの、わが国における近代考古学の歩みは、モース（Edward Sylvester Morse、1838～1925年）による大森貝塚発掘調査（1877年）をその嚆矢とすれば、それでも130余年はあり、そこに醸成されてきた相応の学史（研究史）を有し、当然ながら折々に総括されそして世に問われてきた。当然ながら、内容の多くは考古学がいつ、どのような事績・業績をかさねてきたか、また、他の隣接、関連する分野とどのように補完し成果を成し遂げてきたか、あるいは社会の変容に作用・影響されてきたか等々が研究史論考の基軸となっている。

たしかに前記の辞書の語意に言う「学問」、「科学」ではあるものの、考古学が取り組む遺跡・遺物は、あるときは民間の言い伝えの対象となり偶然の出土・発見によって好奇の目に晒され、そしてあまねく知れわたり、その考究は特定の人々の専有とはならないこともしばしばである。したがって好事家、アマチュア、あるいはいわゆる「在野」の研究者にとって考古学と「好古」学との境界はもはや無いに等しく、良し悪しは別として、奔放な奇説・俗説の横溢するところとなっているの

もまた事実であろう。これを考古学の間口・裾野が広いというべきか。「考古の志ある人の居室に入れば瓦片石塊壺鎧錢鏹鋒缺罈より腐木碎材砂礫のごとき筵に充ちたるあり俗眼より之を睹れば恰も露店の排列より美観ならざるが如し」(『考古説略』[吉田正春1879年]所収、)とは、いまなお大方の見解、考古学に対する^{イメージ}印象の一態ではないだろうか。

考古学に対するこの漠とした^{イメージ}「印象」とはいったい何なのだろうか。それは、およそ考古学に従事し専攻する者等の側、学界が抱くあるいは示唆するものではなく、むしろ考古学を客体として捉える側に生ずるものである。すなわち、社会が如何様に考古学を観ているかを映した形象とみなすべきであろう。以上に大過なければ、筆者はここに学史を考える上でのもうひとつの視点を見出せるのではないかと考えたい。考古学を内包する一般社会は、考古学をどのように受容し、そこにいかなる考古学像を持ってきたか、そして何がそれを作らしめたか。これらもまた学史的考察の対象となるのではないだろうか。今回は野上弥生子(1885~1985年)著『真知子』について試論してみたい。なお、作品読本としては『野上彌生子全集』第七卷(岩波書店、1981年7月6日発行)所収版を使用し、引用文表記については(『真知子』○○頁)とした。また、作家名の表記については、原典表記以外、「野上弥生子」とした。

II 考古学史資料としての小説『真知子』

i 作品大要

筆者はもとより日本文学を専攻する研究者ではないので、小説『真知子』については、公刊された論述を援用することに拠って、先ずはこの作品の梗概等を記すこととしたい：

『真知子』は昭和三年八月から五年十二月にかけて雑誌『改造』(末尾『中央公論』)に断続的に書きつがれ、(中略)題材は法政大学教授であった豊一郎(=夫の野上豊一郎、1883~1950年、筆者注)の周囲にみられた学生の苦悩、或いは旧制浦和高校に学ぶ長男素一の学友たちの業実に暗示されたのであろう。素一によれば、東北大の阿部次郎の令嬢にも暗示をうけたのではないかという(瀬沼 1984)。

この作品は「作者(=野上弥生子、筆者注)が良心的な知識人として抱かざるをえなかった問題が、「才能ある、独立の考を持った美しい娘」で、しかも東大文学部の聴講生として社会学を学ぶ曾根真知子という中流階級出身の女性の、結婚と恋愛の問題を中軸に据えつつ追及されている。全体はほぼ三つの段階に分けられ、第一段階は、彼女の属する中流階級とそれに連る上流階級の生活の「退屈と滑稽と醜陋」に対する真知子の嫌悪と反撥が、彼女の結婚問題をめぐる周囲の動きを中心に描かれる。第二段階は、友人大庭米子を通して知った貧農出身の革命運動家の関という青年に真知子が惹かれ、彼への愛、そして結婚の決意を踏み台に、嫌悪する生活環境から脱出し新生活に飛びこもうとするが、どたん場で、関がすでに米子と肉体関係を持ち、子供をはらませてもいることを知って、関のコロナイズムに毒された考え方を難詰し、この関とも別れ家をも棄てて東北に旅立つところまで。最後は東北の義兄の家に身を寄せていた真知子が、偶然その地を訪れた河井輝

彦と再会し、その学問への熱情と人柄の誠実さにうたれ、やがて河井の資本系統の会社にストライキがおこったとき、河井が会社を職工の共同経営にまかせ、考古学研究所だけを残して不動産のほとんど全部を投げ出すという拳に出たことを知って、河井に対する自分自身の隠されていた愛をはっきりと自覚するところでこの作品は終る（安川 1971）」

ii 小説の時代設定 - 小説の舞台はいつなのか -

『真知子』の発表された年代は、前記のごとく昭和3～5（1928～30）年であるが、まずはこの小説が描述する時代（時代設定）についていまい少し検討・確認しておきたい。

時代特定の手掛かりのひとつは、主人公真知子の義兄で高等学校教師を務める山瀬と、考古学者河井との間で交わされた下記の会話中に見出すことができる：

「いや、何んにも分りはしないんですが、たゞ書物だけはこれで色んなものを読み散らす方ですから、御存じのミハエリスの『美術考古学史』 あれを、調べることがあつて読んで見たのが病みつきなんでして。」「あの書物は誰にでも気に入られるやうですね。」「通俗的だと云つたところで、あれだけ立派な内容を持つてゐれば我々には非常に有益ですよ。さう云へば、一二年前どこからか翻訳も出たやうでしたが。（『真知子』119頁）」

「その言葉で山瀬は、自分は原書で読んだのだと云ふことを明白にした（『真知子』119頁）」

ここに言及された「ミハエリスの『美術考古学史』」とは、その原書を Adolf Michaelis 著 *Ein Jahrhundert kunstarchaologischer Entdeckungen*（1908）とみなせようか。この翻訳書が濱田耕作（1881～1938年）によって『美術考古学発見史』として1927年に著されているので、翻訳書出版年から起算すると、小説舞台を1928年あるいは1929年とすれば、『真知子』発表年（1928～30年）と重なる。

いまひとつは、真知子が友人の米子より、関が自らの思想活動が原因で大学から放校処分された旨を聞く場面に表わされている：

「三年前、関西の大学に起つた、多くの学生の放校や若い教授の免官に終つた左傾的な騒動を、彼女は忘れてはゐなかつた。それは純粋な実行運動と云ふより、社会科学の研究を標榜したもので、官権の圧迫に依つて却つて英雄的にされた彼等の言動は、同じ学問に志す若い者の同情と興味を煽つたので、当時の新聞紙に報道された公判やその他の記事に対しても、最も熱心な読者であつたと云つてよかつた。（『真知子』50頁）」

このくだりは、京都大学、同志社大学の左翼学生運動に対する弾圧事件として1925年12月から翌年1月にかけて起こり、治安維持法適用第1号事件となつたいわゆる「京都学連事件」を指して云つていられる。とすれば、これを「三年前」の「騒動」と記す小説舞台は1928年から1929年となり、先のミハエリス著『美術考古学史』（翻訳版）から設定される年代と矛盾しない。

さらに、真知子や姉たちの階層がやがては否定される日が来る、との思いを巡らす件：

「金と時間の無目的な消費で、ブルジョアジに湧いた蛆の生活の一聯が彼女の上にも - 他の驕慢な有閑夫人の群と同じく、(真知子の偏愛は、如何に彼等からこの姉を分離させたかつたか!) 続くであらう。おゝ、しかし或る日の鐘が鳴るまでである。(中略) - また十一年前、モスクワの赤い広場^(ママ)でなされた如く。」

この「十一年前、モスクワの赤い広場でなされた」ことを、先後関係より「ロシア革命」を意味すると解すれば、それより11年後である小説舞台は、計算上、1928年となる。

したがって、これらの諸事項を拠り所として、また『真知子』の発表年1928～30年を先ずは考慮すれば、この小説の舞台は確かに1928、29年(昭和3、4年)と考えて良いであろう。

iii 考古学者「河井輝彦」

小説『真知子』には、ヒロイン曾根真知子(24歳)への求婚者として考古学者河井輝彦が登場する。この河井輝彦については次のような人物設定となっている：

「有名な旧家で千万長者の河井家の一門であること、はやくからケンブリッジに留学して考古学を専攻し、日本にはやつと半年前帰つた(『真知子』21、22頁)」

母親は「徳川氏の血統を引いた大名華族(『真知子』24頁)」

河井はその邸内に研究室を建築中であり「完成の上は、日本では他に類のない理想的な研究室になる(『真知子』22頁)」との評判がある。

また、河井自身の研究活動、考古学研究者としての姿勢は、たとえば下記の文脈によりその一端を窺い知ることができる：

「河井は中央亜細亜の方を廻って、今少し貴重な標本を集める積りであつた(『真知子』24頁)」(真知子が問う外国行に対する返事として)「河井は見残した歐洲の二三の地方と中央亜細亜をあげた。帰路にはロシアに出て、そこに滞在するつもりだと云つた。」(中略)「モスクワの前史学会の会長は、ラベ・ブロイ教授の弟子で、なかゝ精力的な学者ですが、最近に貰つた手紙に依りますと、蒙古で大規模な発掘を計画してゐるらしいのです。」(中略)「いっしょに北欧を歩いたりしたことがあるものですから。帰りには是非ロシアに廻れ、その頃には自分たちの蒙古の仕事も緒に着くだらうから、それを見て行けと、申してまゐつてるのです。ソヴィエト政府も、革命直後と違つて、斯う云う種類の学術的事業にこの節は力を入れるやうですし、またさうなると、スラヴ流に思いきつたことをいたしますから、今度の発掘も立派な効果を挙げるだらうと思ひます。『真知子』342、343頁)」

「河井は英国が最近^{エジプト}埃及に続けてゐる発掘や、米国の学者が蒙古に試みた同じ計画をあげ、本来なら垂細垂の土地を外国人の鍬で掘り返されることは、日本の考古学者に取つては感情上忍びないものがある訳だと云ふ意味を、真知子が少し驚き、見張つた、生きゝした黒瞳で、大胆に彼の顔をうち守つたほどの強い口調で続けた。(『真知子』118頁)」

iv 『真知子』が語る考古学～昭和初期における考古学世評の一例～

それでは、『真知子』の物語る時代(昭和3、4年)において、考古学という学問・研究は世間からどのように見られていたのか。『真知子』の中にいくつかの事例を読みとることができる：

「真の学問は河井如き境遇に於いてはじめて可能(『真知子』113頁)」(真知子の義兄山瀬)

「日曜の度にM-君(引用者註、山瀬の勤める学校の歴史の担任で、河井が援助している考古学のある研究会に属している同僚の名)に連れられて鍬をかついでは出掛けてみたやうな連中でも、大学に進む頃には、土の底の^{かほくづ}瓦屑や素焼の破片が、プロレタリアトのパンになり得るか」と云つた調子に変わるんでして、(『真知子』120頁)」(真知子の義兄山瀬)

「一般には誰だつて、地の底の過去の世界の人間がどんな生活をしてゐたかより、地上の現在の社会をどうして住みよくするかの方に、関心を持つのは当然だ(『真知子』121頁)」(真知子)(河井の求婚に対し)「それゝ気に入つた暮らし方をして、それで誰をも虐げない社会を作り出さうとして、首になつたり、豚箱に投げ込まれたり、学校から追ひ出されたりしてますわ。その中で、どうしたら一万年前の人間の使つたがらくたなんぞ問題にしてゐらつしやれるかともふと、勿論学問としては必要であり、立派なことであるにしても、私の今の気持では、お母様のお鼓のお相手が勤まらないと同じに、あなたのさう云ふ生活のお相伴をしようとは思ひませんわ。(『真知子』272頁)」(真知子)

(考古学を「土の下のことだから、ばかにしてた(『真知子』344頁)」と思われたことに対し)

「どんな仕事だつて、高い目的に結びついてさえゐれば、値打に变りのないことを知つたのです。漸くこの頃になつて。」(真知子)「併しどちらを採るかの問題になれば、あなたとしては矢張り土の上の世界をお扱ひになるだらうと思ひますが。」(河井)「それは勿論ですわ。ですから私があなたでしたら、ロシアへ廻るにしても蒙古の発掘よりか、あの国に造られてゐる新らしい社会を見るほうがたのしみです。」(真知子)「我々が発掘に価値をおくのも、云はば同じ心理かと思ひます。それに依つて、推測がはじめて実証されるわけですから。」(河井)(いずれも『真知子』344頁)

「どんな社会でも、自分たちの過去ははつきりさせる願望を捨てないでせうから。(『真知子』348頁)」(河井)

(経済危機に陥った河井について)「それでも河井さんは研究とかなんとか、瀬戸つかけでもいぢつてゐらつしやればそれですむでせうが、お母様が如何にもお可哀さうだと思ひましてね。(『真知子』381頁)」(真知子の嫂の義母)

小説『真知子』の作風のひとつは、ヒロインがひととき強く感化、魅了された社会主義運動家関三郎あるいは友人米子に代表される「無産階級」と、真知子自身が帰属する有資産家たちとを対峙させることから生み出されている。そして、考古学者河井輝彦は、もちろん後者すなわち「ブルジョア層」の典型人物ではあるものの、真知子が嫌悪感さえおぼえさせられる、例えば嫂の義母倉子とその周囲とは何かしら異なるところを有する人物像として、真知子の懊悩する場面の要所々々に登場する。たしかに河井の境涯は極めて特異であり、それを増幅強調する要因のひとつとして「考古学」が河井像に付帯されているともみられる。

河井は、東京青山の邸内に陳列室を兼ね備えたみずからの「研究室」を整備しつつあった。たまたま義兄山瀬と共に訪問の機会を持ったこの研究室と、これを含み持つ河井邸の在り様について真知子の抱いた心持こそはこの物語における「考古学」の役割を表徴しているとも思われる。以下はその件である。真知子は「研究室」へと河井の邸内を歩み行く：

「車寄前の植込についた入口から、かなめ垣や、桜の木立や、広い冬ざれた花圃^{くわぼ}に沿うて廻るやうになつた裏庭の、低い松の中に見出された建物（筆者註、河井の「研究室」のこと）は、毎日学校に行く時見て通る駕籠町の東洋文庫を真知子に思ひ浮かべさせた。尤も大きさは三分の一もないくらいであつたが、材料と様式と色の類似から、二つの建築は同じ感じに出来上つていた。（『真知子』116、117頁）」

一行は河井の「研究室」を見学し、そこで茶菓のもてなしを受ける。さらに邸内をひとりで散策することとなつた真知子に、やがて次のような心境が訪れることとなる。：

「花圃の向ふ方では、二人の園丁が、花のあとの秋薔薇らしい小さい列になつた灌木の手入れをやつてゐた。彼等の缺は、それ以外何等の物音も聞えない、また誰ひとり人影もないあたりの虚無に、一定のリズムでより深い静けさを刻みつけた。真知子は歩きながら金属性の単調な響きを耳にし、眼の前の明るい、空つぼな、土の拡がりを眺めてみると、家からも友だちからも社会からもかけ離れた、なにか恐ろしく遠い場所に来てゐる気がした。事実、鼓や、蘭の花や、あの考古学の研究室や、この一廓のすべてのものは、彼女の心からはあまりに遙かな別の世界であつた。（『真知子』123、124頁）」

この直後、真知子は友人米子へ買い求めたばかりのローザ・ルクセンブルグ（マルクス主義政治理論家、1871～1919年）の書簡集を持参することにたちまち思い至る。それは、河井と彼の「考古学」の世界が、「その筆者の有していたような思想や主義に対して、また死で終わった彼女の勇敢な戦いに対して、階級的に当然敵の地位に立たされている」という真知子の意識が強い誘因となつていと読めるところであり、前記同様、この物語全体の展開をある意味象徴する要所のひとつと思われる。

Ⅲ 大正～昭和初期の考古学界およびその関連周辺の注目すべき事項

それでは、『真知子』時代の日本考古学界の動向、すなわち、この小説が著されるまでに、作者をして考古学を物語中に設定するに至らせたこの学問世界の動向は実際のところ如何であったのか。『真知子』発表の昭和初期までを、大正期に遡って考古学界ならびにその周辺に関わる事項、あるいはきっと一般人にもその関心事が届いていたであろうと考えられる主だった事項に関して検索すると、例えば下記のように例示することができる（斎藤 1974に拠る）:

- ・ 1912（大正元）年：関野貞（東京帝大）ほかの朝鮮古蹟調査（楽浪古墳）の発掘調査（既に5次）
- ・ 1912～1917（大正元 - 6）年：西都原古墳群（宮崎県）の発掘調査（東京・京都帝大、東京帝室博物館、宮内省）
- ・ 1916（大正5）年：京都帝大文学部にはじめて考古学の講座が開設された（初代教授は濱田耕作）
- ・ 1917～1918（大正6 - 7）年：京都大学考古学教室による九州、関西、中国地方の遺跡調査
- ・ 1919（大正8）年：「史蹟名勝天然紀念物保存法」公布（翌年の第1回指定は天然紀念物関係のみ）。このころより縄文時代の貝塚遺跡調査が活発化
- ・ 1920（大正9）年：このころより「邪馬台国」問題についての論争が具体的に見えはじめる
- ・ 1921（大正10）年：「史蹟名勝天然紀念物保存法」により、38件の史跡が指定される。平城宮跡もこの年10月に指定（2年後より保存事業開始）。この頃より、行政では「史蹟主事」が置かれるなどして「史跡の調査も行われたが、この調査に際しては、考古学者や歴史学者も委嘱され、県の専門職員とともに事に当たった（斎藤 1974、211頁）」
- ・ 1922（大正11）年：概説書『通論考古学』（濱田耕作）発刊。加曽利貝塚（千葉県）の試掘調査。
- ・ 1924（大正13）年：加曽利貝塚の層位学的調査
- ・ 1925（大正14）年：「東亜考古学会」発足（朝鮮半島、中国大陸の遺跡調査を目的とする）
- ・ 1926（大正15）年：7～9月、姥山貝塚（千葉県）本調査。この遺跡調査をスウェーデン皇太子グスタフ6世アドルフ見学。この年、松村瞭（東京大学人類学教室）が摂政宮（昭和天皇）へ、姥山貝塚について御進講。
- ・ 1927（昭和2）年：概説書『日本考古学』（後藤守一）の発刊。

日本考古学研究の変遷を学史的にたどる時、その画期をどのように設定するかについては確かに様々な史観がある。斎藤によれば大正時代の考古学は「明治年間の東京大学理学部人類学教室中心の学風、或いは江戸時代からの伝統をもつ珍物愛好の一部の風潮からようやく脱皮し、真の科学としての考古学への躍進のとき（斎藤 1974、197頁）」であった。「考古学界が従来の人種論的考え方から脱却（駒井 1972、180頁）」、「人種論から遺物の層位的研究に向かって歩みはじめた（同前、

181頁)」とも表現される。具体的には、「アイヌ」、「コロボックル」問題に代表されるような日本民族人種問題から、より人文科学的な、考古学研究の基礎たる発掘考古資料の「層位（層序）」や資料分類上の「形・型式」概念に依拠する考古学的アプローチの実践、さらには、食料生産基盤に関わる課題としての農耕の開始問題等々の意と理解される。これらの動向は、遺跡調査の活発化、研究者層の拡大と相乗・連鎖し、とくに関東地方の縄文時代遺跡の発掘調査ならびにそれらを基とする研究を進展させた。その一翼を担い、具体的には研究グループ「史前研究会」、「史前学会」等を主宰し、さらには自営の「考古学研究所」を構え、あたかも『真知子』に登場する河井輝彦のような考古学者として大山柏（1889～1969年）の存在が注視される。

IV 大山柏と「大山史前学研究所」

日本考古学史における大山柏の存在は、研究業績の秀抜さ以上に、戦前期におけるその社会的地位上「華族」という特異性がある。大山に近しく関わった先学によれば、その人物像・業績の一端は下記の如く伝えられている：

- ・ 「先生（＝大山柏、筆者注）は大戦後のドイツに遊学、オパマイア（H. OBERMAIER）教授について、ヨーロッパの旧石器文化の研究をされ、一九二五年帰朝後、渋谷穂田（今日の渋谷区神宮前五丁目三）の大山公爵邸内に大山史前学研究所を設立され、東京帝国大学理学部人類学科選科修了の若手の俊英、甲野勇、宮坂光次氏らを研究所員に迎え、研究所を華々しくスタートされたのであった。（江坂 1989、328頁）」
- ・ 「大正15（1926）年から昭和6年まで、研究所の宮坂光次、甲野勇、竹下次作氏などのスタッフを動員して関東地方の各地の貝塚98カ所を発掘調査し、その貝塚所在地の谷によって時期、形式の相違と、貝類相の相違などを調査、あわせて貝層と貝層下の土器形式の相違などのも注意し、層位的な研究も行ない、この結果を昭和8年10月、宮坂光次、池上啓介氏と共著で『東京湾に注ぐ主要溪谷の貝塚に於ける縄紋式石器時代の編年學的研究予報 第一編』（『史前学雑誌』3巻6号代冊）として発表されたが、この仕事は同研究所が最も力を入れた研究の一つであった。（江坂 1969、2頁）」
- ・ 「南関東地方の縄文土器文化の編年的研究の大綱はこのようにして大山史前学研究所の研究成果によってほぼ完成の域に達したのである。（江坂 1969、2頁）」
- ・ 「大正年代後半から昭和の前半にかけて、わが国の考古学界に大きな足跡を残された私達の師である大山柏先生（江坂 1969、3頁）」
- ・ 「この大山史前学研究所については、どなたか日本の考古学の専門家が正確に記録して置いて欲しいものであるが、山階鳥類研究所（山階芳麿侯爵）・徳川林政史研究所（徳川義親侯爵）とならんで、当時の華族が私的に経営しておられた純然たる科学研究所として聞こえていたものであった。穂田の大山邸の一角に二階建ての木造建築脇門から石段を上り左手のところにあった。玄関を入ると、すぐ広い研究室。（稲生 1989、334頁）」

- ・「私（＝宮崎糺、筆者注）が、初めて研究所をお訪ねしたのは、たしか昭和八年、国学院大學の予科生で一年後輩の稲生典太郎君に連れて行かれた。研究所は、渋谷駅から宮益坂を登り、青山通りを左に入った、大山邸の宏大なお邸の一角にあった。研究所の建物は、簡素な木造平屋建て、いつもは、池上啓介、竹下次作氏、それに会計の岡田さんの三人だけであった。学校から徒歩で二十分足らずの距離にあったので、「休講」の時など、よく出かけていった。（宮崎 1989、338頁）」
- ・「戦前のわが国の考古学界は、東京帝室博物館を中心とした日本考古学会、東京帝国大学理学部人類学教室に本拠をおく人類学会、京都帝国大学考古学教室の三者が主流をなしていた。そしてそれぞれ『考古学雑誌』『人類学雑誌』が出ていた。そこへ『史前学雑誌』が、新たに登場した。「大山史前学研究所」及び「史前学会」は在野の研究機関とはいえ、元帥公爵大山巖の嗣子の主宰する機関で、その機関紙『史前学雑誌』が昭和十八年五月発刊の十五巻一号を最後に姿を消すまで、我が国の先史考古学界に寄与した功績は大きい（宮崎 1989、341頁）」

この「大山史前学研究所」は東京大空襲（1945年5月25日）により、建物およびその殆どの資料が灰燼に帰した。先年、かつて研究所の在った大山邸跡が発掘され、当時研究所に関わった人への聞き取り調査成果とあわせて、この「大山史前学研究所」の実相が論考されている（阿部 2004）。



昭和4年発行国史講習会・雄山閣発行『考古学講座』（左）第13巻、（右）第14巻

大山柏による「大山史前学研究所」は、かつて「徳川林政史研究所（徳川義親侯爵、1923〔大正12〕年設立）および「山階鳥類研究所（山階芳麿侯爵、1932〔昭和7〕年設立）」と共に、いわゆる「華族3大研究所」のひとつに挙げられていたものである（前出）。すなわち「考古学」が特権的階層の学問のひとつとして機能していた私的研究所であった。それは、単なる好事家の学問ではなく、学史が語るように、具体的成果・業績を多く結実し、斯学に貢献するところ大であった（前出の各引用文）。さらに、大山柏もまた、学界内

活動ばかりではなく、考古学の一般普及を意図した具体的尽力を為していることは、例えば、その「主要文献目録」（江坂 1969、3頁）等からも窺える（図版参照）。

V むすびにかえて

したがって、大山柏ならびに「大山史前学研究所」が、大正期から昭和初期に至る時期において、一般人をしてそれまで以上に、学問としての「考古学」的活動へ関心を向けさせた、と思考することはできるであろう。それは国内における「考古学」の動向からばかりでなく、国外のうちアジア大陸の考古学に対しても、あてはまるどころがあると考えられる。なぜならば、当時の日本が多目

的に指向していたのが、アジア大陸であった、との国情からでもある。もっとも、大山柏自身が海外（＝欧州）で考古学を学び、日本に先行する方法論あるいは、当時の日本にとっては新たな研究対象分野（例えば「旧石器時代」）を習熟していたにもかかわらず、しかしそれが未だ日本の考古学界では尚早との認識は確かにあり（たとえば大山 1929、第1編第1章）アジアにとどまったのであるが。

考古学界の動向については、『真知子』中の考古学者河井が海外をその研究・関心の対象としていることから、真知子と河井との間に以下の会話がなされる件（『真知子』343頁）は、したがって注視される：

「発掘とは別ですが、ヘデン博士の蒙古と西藏の映画、御らんになりまして。」「いや、見たいと考へながら。」「庫倫を立つ時でしたか、何百頭と買はれた駱駝に支払つた夥しい銀貨が、天山の奥地へ、その駱駝がつけて入る山のやうな物資といつしよに映されてゐますの。（後略）」

この「ヘデン博士の蒙古と西藏の映画」とは、『西藏と蒙古』（原題“Through the Death Desert of Asia”、1929年ドイツ制作、監督ワルター・クーフェルト（Walter Kofelt）撮影・編集スヴェン・ヘディン（Sven Hedin））を指していると考えられる。『真知子』の舞台は東京ながら、1930年6月11日付『大阪朝日新聞』には、同年同月12、13両日、「朝日会館」にて上映されたとの記載がある。これについては、小説『真知子』の発表年すなわち1928年8月から1930年12月と照らし合わせると、東京で先行（？）して上映があったのか、あるいは、物語上の虚構なのか再検証する必要がある。しかしながら、中央アジアへの考古学的関心については、いわゆる「大谷探検隊」（1902、1908～09年、1910～14年）やA・スタインの所業（1900～01年、1906～08年、1913～16年）そしてヘディン（＝「ヘデン博士」）の1890～1930年代の業績およびその来朝（1908、1929年）などは、河井の考古学者像に強く込められたと考えられる。とくに、ヘディンの1908年来日時の事跡は、明治天皇・皇后への拜謁ほか、高級軍人（東郷、乃木）や京都西本願寺における大谷光瑞との会見、「勲一等瑞宝章」授与等々、当時としては耳目を驚かすものであったにちがひなく、学史上いわゆる「敦煌学」からの系譜に連なるところが大きいと考えられる。

筆者はかつて、この「敦煌学」に関連して中央アジア探検家スタイン（既出）の1930年来朝について論じたことがある（大津 2007、2008）。スタインが当時かいま見た、そして具体的に交わった日本人東洋学者、考古学者たちはまさしく『真知子』と同世代であり、そのひとりとして大山柏があったことは注視すべきであろう。当時スタインの来訪を受けた大山柏による、下記のような回想録がある：

「今年代を覚えていないが、日本にも来、私の家にたずねてきた。何んの予告もなく突然我が家にきたのだから、私はビックリ仰天した。初対面であり誰の紹介もない。私は合点がゆかないので、貴君は探検家のスタインかと直言したら、然り然りで、本物のスタインと解った。彼

の目的とするところは日本の石器時代と大陸との関係にあり、何処で覚えたのか縄紋式や弥生式等に就ても、一通り心得ておるばかりでなく、(中略)こうしてスタインの日本滞在中は色々(ママ)と研究に就て私は世話をしてやった。(後略)(大山 1989、202、203頁)。

大山は「今年代を覚えていない」と述べているが、当のスタイン本人が遺す記録(日記)によれば、「Duke Ohyama's house」訪問は、1930年4月12日土曜日のことであった(大津 2007、104~106頁)。スタインの日本到着はその月の10日であったから、早々に大山を訪問していることとなり、このことから大山が当時日本考古学界においていかに要人的存在であったが首肯される。

『真知子』の中に登場する「考古学」は、昭和初期(3、4年)をその舞台として設定された。考古学の一般社会での認知・普及は未だ限定的、狭小で、主人公をして「あまりに遙かな別の世界」にあるものとの思いを抱かせたのはある意味自然である。考古学が取り扱う資料自体は、『真知子』中の表現を借用すれば、たとえば、日曜の度に出かけて発掘される「瓦屑」、「素焼きの破片」あるいは「瀬戸っかけ」といった遺物の日用性から、したがって極々身近な存在としてあるものである。にもかかわらず、それらを研究資料として取り扱う「考古学」は、すくなくとも『真知子』の中でもまた、市井の民にしてみれば、不要とまでは言わなくとも、不急の学問であった。

『真知子』は、当時の「ブルジョアジ」対「プロレタリアト」を、その具体的登場人物像の「関」対「河井」に具現化することで社会構図を表象させている。そして、「良心的な知識人として抱かざるをえなかった問題(前出)」にとって、「考古学」の有り様は揺れるばかりである。すなわち、真知子をして「勿論学問としては必要であり、立派なことであるにしても」と考えさせるのである。

『真知子』における既述の「考古学」像は、たしかにこの小説テーマにおける単なる象徴物、そして仮想像であるかもしれない。しかし、作者がこれほどに「考古学」を小説作品中に活用しえた事は何を意味するのか。

モース(既出)による大森貝塚(東京)の発掘調査(1877年)あるいはその調査報告書刊行(1880年)を、わが国における科学的近代考古学の嚆矢とすれば、『真知子』はそれより略半世紀後の考古学の世界を、もちろん小説的虚構を含めて、著していることとなる。この半世紀間は、日本の考古学のまさに急成長期であった。前記した大正年間の学史に顕著なごとく、その研究調査分野、方法論、フィールドは大きく拡大した。考古学が新興、進展する一学問分野として、そして社会的制約の小さくないながらも、公的機関による調査活動・研究が軌道に乗りつつある中、ここにさらに「華族が私的に経営しておられた純然たる科学研究所(前述)」のひとつとして「大山史前学研究所」が加わり、精力的活動を見せた。この「大山史前学研究所」の主宰者大山柏(1889~1969年)と『真知子』の作家野上弥生子(1885~1985年)は同代人として、考古学史上では変革・充実の時期「大正時代」を生きたことになる。ちなみに、野上は1900(明治33)年上京以降、在京である(『現代日本の文学』第8巻[学習研究社]第15版[1975年]所収「野上弥生子年譜」)。

『真知子』にみられる考古学像は、小説進行のなかでは確かに「あまりに遙かな別の世界」事を

表す要素として読みとられるものの、考古学史に照合すると、虚実相混じりながらも、日本考古学の充実・画期を成した一時期である大正～昭和初期の学界動向を彷彿とさせるのである。

【参考文献】

- 阿部芳郎、『失われた史前学 公爵大山柏と日本考古学』、岩波書店、2004年3月12日。
- 稲生典太郎、「大山家三代」(大山 柏著『金星の追憶 回顧八十年』、鳳書房、1989年8月15日)
- 江坂輝彌、「大山史前学研究所と大山柏先生」、『考古学ジャーナル』no.36(通巻)、ニュー・サイエンス社、1969年9月30日、2～3頁。
- 江坂輝彌、「大山 柏先生を偲ぶ」(大山 柏著『金星の追憶 回顧八十年』、鳳書房、1989年8月15日)
- 大津忠彦、「スタイン滞日日記にみるシルクロード研究(Ⅰ) - Bodleian Library (Oxford) 所蔵資料 Ms. Stein 250より - 」、『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第2号、筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部、2007年1月31日、99～110頁。
- 大津忠彦、「スタイン滞日日記にみるシルクロード研究(Ⅱ) - Bodleian Library (Oxford) 所蔵資料 Ms. Stein 250より - 」、『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第3号、筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部、2008年1月31日、63～73頁。
- 大山柏、『考古学講座』第13巻、雄山閣、1929年4月10日。
- 大山柏、『金星の追憶 回顧八十年』、鳳書房、1989年8月15日。
- 駒井和愛、『考古学概説』、講談社、1972年11月25日。
- 斎藤忠、『日本考古学史』、吉川弘文館、1974年8月10日。
- 瀬沼茂樹、『野上彌生子の世界』、岩波書店、1984年1月20日。
- 宮崎糺、「史前学者大山 柏先生の思い出」(大山 柏著『金星の追憶 回顧八十年』、鳳書房、1989年8月15日)
- 安川貞夫、「評伝的解説 野上弥生子」、『現代日本の文学』第8巻、学習研究社、1971年8月1日。

(おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授 ohtsu@chikushi-u.ac.jp)